

【エッセイ】

バーンアウト体験の思想化

——相模原障害者殺傷事件の空白部分に関する仮説——

深谷美枝

2016年7月26日、山間の静かな施設である津久井やまゆり園で19人の利用者が元職員である植松聖(ウエマツサトシ)という青年に殺害され、26人が負傷するという痛ましい事件が発生した。

同日明け方にこの事件の第一報を耳にした時、驚き悲しむと共に正直、とうとう起きたかというような気持ちがあった。確かに事件自体、薬物使用歴がある病理性の高い人物⁽¹⁾によって引き起こされた特異な事件である。しかしこの事件の底流には深い日本社会の毒のようなもの、キリスト者である筆者の立場から見れば「罪」がマグマのように流れていて、裂け目を求めて噴出しただけのように感じたのである。また、かつて筆者が知的障害児施設に勤務した経験からすると、どんなマスコミ報道も背後にある福祉現場の置かれた社会的状況を正確には捉えていないように思えてならなかった。

筆者には、この事件は1人の病理性の高い青年が厳しい施設実勤務経験の中で「燃え尽き」を経験し、その体験を日本社会を流れる「社会的毒」のようなものを吸いこんで稚拙な形で思想化し、ヘイトクライムという形で行動化したものという個人的仮説⁽²⁾がある。1年を経てもこの認識は変化せず、最近になって獄中で書かれた書簡や獄中ノート等が公開されるたびに少しずつ補強もされて来た⁽³⁾。編集者が本質に迫る追及をすればするほど空白部分、埋まらないピースの外枠が明らかにされていくような形においてである。

ヘイトクライム

この事件は一つのヘイトクライムであるとされる。ヘイトクライムとは人種・民族・宗教・性的指向などの特徴を持つ個人や集団に対して、偏見や憎悪などが元となって引き起こされる暴行等の犯罪を指す。この事件では犯人は「障害者は生きていても不幸を作るだけだ」等と発言し、家族や施設関係者に大きなダメージを与えてしまった。それだけでなくその差別思想に同調共鳴する声が多く上げられ、被害者と同じ知的障害を持つ人々のみならず、あらゆる障害を持つ人たちに差別メッセージが送られ、差別的な思想が日本全国に届いてしまったのである。

能力や効率を偏重する「新自由主義的思潮」が、それが無いものは生きる価値のないもの、切り捨てられてしかるべきものという「優生思想」に安易に結びつき、排除の風潮を生みだして来た。それが日本社会の底流に流れる「社会的毒」の正体であると筆者は考える。政治家たちですら平気で排除を口にして問題化するほどなのである。容疑者はこのような思潮を稚拙な形で取り入れて思想化し、一種の称賛に値する英雄的行為を気取りながら実行に移してしまったのだろう。

そして犯行後1年を経てもその思想的な変化は見られない。7項目に渡る主張を様々なマスコミに対して発信し、それをまとめて「新日本秩序」なる冊子にして世に問おうとした⁽⁴⁾。同冊子「新日本秩序」では第1章で意思疎通の不可能な重度障害者を「心失者」と呼び、安楽死させるべきだと主張している。また、最新の雑誌インタビューでは自分の主張が世間の大半の人々に理解されると確信している様子すら窺える⁽⁵⁾。

埋まらない空白部分、浮かび上がる外枠

しかし、この事件が特異なのは、ごく最近まで殺された対象者を支援し、日

常に顔を合わせ、肌と肌を接していた職員が殺傷した、という点なのである。日常顔を合わせていれば人間同士、一般論として個人的で親密な感情の交流も生まれるであろうし、「障害者」と一くくりにしてのヘイトクライムの対象としにくいと考えられるのである。

就業前の容疑者は障害者に対する偏った思想は持ち合わせてはいなかったし、就業後3年目に入った15年12月にもボランティアに対して「障害者も一人の人間だよ。心も感情もある。やさしく接したら大丈夫」と語って励ましたという。しかし、年が明けた頃から「障害者が生きているのは無駄だ」と書いたビラを勤務先周辺にまくなど、急激にその言説を変化させていった。

利用者と日常的に接しながら、一体何故、どのようなきっかけや出来事からそのような変化が生まれたのだろうか。あるいはどのような体験や過程を経てそのような思想を形成したのか。

そのことを最近の雑誌インタビューでは植松本人に、以下のように直截的に質問している。

「前回のお手紙で、あなたの考え全体はわかったのですが、気になるのは、あなたは津久井やまゆり園での職員としての仕事を通じて、そういう考えに至っていったわけですね。一般的に言われるのは、障害者と接している人たちは、世間の人と違って身近に接しているがゆえに障害者に対して愛情が生まれるということなのですが、あなたは障害者と接していった結果として逆というか、今のような考えに到達していったわけで、それはどういうきっかけでそう思うようになったのでしょうか。あるいはいつ頃からそう思うようになったのでしょうか。」⁽⁶⁾

それに対する植松本人の返答は以下のものであった。

「…障害者施設や精神病棟など、閉じられた施設において管理する職員と利用者の間には支配・被支配の関係が構築されやすいことが指摘されています。アメリカの社会学者E.ゴッフマン氏が著書アサイラムの中で障害者施設などを全制的施設と呼び、その構図を説明しております。こうした施設の現場ではたびたび暴行事件が起きていることも報道されています。」⁽⁷⁾

このコメントには障害者と接しているが故に愛情や親密さが生まれるのではなく、逆に入所型施設の持つ「全制的施設」としてのありよう、つまり組織病理としての管理主義化、入所者をなるべく効率よく支配し管理するシステムに巻き込まれ、流されたが故に、今のような思想に至ったことが端的に表現されている。

この返答において利用者を非人格化出来た理由の外枠を捉えることは幾分出来るであろう。しかし「障害者は生きていても不幸を作るだけだ」と感じ、抹殺を実行するまでの体験や過程は空白のまま、残されている。肩をすかされた感じ、なのである⁽⁸⁾。

ただこの手紙やノートには彼の障害者観が吐露されている部分がある。たとえば以下のような箇所である。

「心失者は人の幸せを奪い、不幸をばら撒く存在です。今の言葉では重度・重複障害者がこれに当てはまると考えています。私の考える大まかな幸せとは“お金”と“時間”です。人生はお金がすべてではありませんが、すべてにお金が必要です。人の命は時間であり、命には限りがあります。心失者を養うためには莫大なお金と時間がかかります。」⁽⁹⁾

この文章にはケアに当たったことで命、つまり自分の限りある時間を奪われたという植松の感覚、つまり消耗感が表現されているように思われる。また次の箇所には重度障害者に対する支援という仕事の価値を感じられない空虚さ、

達成感のなさの表現が感じ取れる。

「Gさんという重度・重複障害者がいました。彼の日中はオムツとヘッドギアを付けて車いすにしばり固定されており、食事はドロドロの流動食を食べさせると同時に多量の服薬を行います。便が詰まる為に腹から腸を出しストマパウチを付けています。お腹から糞を垂れ流す、と言えば分かりやすいかもしれませんが。眠る時は服を脱がないようにつなぎを着て、指を動かさないようにミトンでしばります。もちろんGさんは言葉を話すことができませんし、目は動き回り何を見ているのか分かりません。管理職員とGさんについて話す時がありました。『Gさんは不幸です』。」

総じてみると植松が組織病理としての管理主義化の中にあつたという外枠と共に、消耗感と空虚感を抱いていたという、筆者のバーンアウト仮説を補強する断片が見え隠れするのである。

空白の場所—歪んだ思想を生みだした元凶としての「燃え尽き体験」仮説

筆者は「埋まらないピース」のその場所に津久井やまゆり園という現場の置かれた状況とその中で容疑者が体験したであろう「燃え尽き」という原体験を想定する。

津久井やまゆり園は県立施設ではあるが、指定管理制度を取る民営施設である。元県立施設職員として事情を明かせば、民間施設では引き受けることの難しい重度の人達を、公的な責任によってどんどん引き受けていた施設であった。事件当時も3分の2はもっとも重い支援区分6の利用者である。

言葉は話せないか、あっても単語程度。身体障害を重複しているか、あるいは行動障害と呼ばれる自傷他害・破壊などの行動がある人たちが多。筆者が支援していた重度の児童も多数移籍している。高齢化も年々進んでおり生活の

大半を介助を受けて生活しなければならないし、年齢が高いこともあり、支援してもその成果や進歩が目に見える形では顕れにくく、達成感ややりがいというものを感じにくい。

県立県営の施設であった頃は圧倒多数が県職員であり、給料や待遇も保障され職員配置もそれなりに配慮されていた。県の福祉職の手取りは一般行政職より手当てが厚いため、筆者の経験では9万円も高かった。しかし、民間になった時に利用者の支援の困難はそのまま、給与はもとより、職員配置等も運営の合理化の名の下で切り詰められていたことは想像に難くない。夜勤の賃金が神奈川の最低賃金905円だったという報道がなされて事件後、大変驚かされた。

骨の折れる介助、達成感の持ちにくい仕事、よいとは言えない待遇の中で、容疑者は対人援助職がかりやすい「燃え尽き症候群」にかかったのではないかと筆者は考える。燃え尽きとは「バーンアウト」ともいい、「長期間にわたり人を援助する過程で心的エネルギーが過度に要求された結果、極度の心身の疲労と感情の枯渇を特徴とする症候群」とされる。一種の反応性鬱病ともいわれ、最近の知的障害者施設での調査でも誤差はあるが20～40パーセントもの職員がその兆候を示しているという。容疑者は3年程度の勤務歴であるが、3年目が通常ハイリスクとされている。

バーンアウトの特徴は「情緒的消耗感」「脱人格化」「個人的達成感のなさ」と言われるが、筆者は特に「脱人格化」に注目する。脱人格化とは支援している相手を人間とは思えなくなり、物のように機械的に扱い、悪くすれば虐待的な言動を引き起こすのである。これは容疑者の感覚にも一致し、かつて筆者も体験したことであった。

バーンアウトと闘った個人的経験

筆者は県立知的障害児の施設に4年間勤務し、月4回夜勤もある生活支援のシ

フトで働いていたことがある。当時のシフトワークは早番が6時半から3時、最遅番は1時半から10時までで、早番から遅番に切り替わる時などは最短8時間半しか間隔がない。通勤時間を除けば6時間半の間で生活しなければならない。夜勤の時は仮眠が1時間半である。シフトが順調に廻っている時でもきついのには、病欠者が出ると超勤連勤もある。夜勤明けに会議がある時は不眠でも出席しなくてはならないし、行事等の時には休暇でもボランティア出勤がある。そんな勤務をして生理が3年間止まった。20代の女性の生理が全く来なくなるほど、身体に堪えるのである。

時間的にタイトな上に、労働の質の問題がある。人間相手の仕事で「感情労働」とも呼ばれ感情への負荷が大きく、ほぼ連日精神的な負担や重圧、ストレスを負わなければならない。重度の知的障害児者の場合には感情労働だけでなく、利用者に体力があったり動きが激しかったり、障害特性から自傷他害があったりするので肉体労働でもある。

筆者は常にマンツーマンで行動を把握しなければならない利用者に、1年貼りついて支援した。仮にAとしておこう。Aは最重度で知能指数は測定不能、強度行動障害と言われる自閉症でも支援の最高に難しいと言われるタイプの利用者だった。もう18歳くらいになっていたかと思う。一瞬でも目を離すと必ず何か事件を起こす。カラーテレビを棚から引きずり落として壊したこともあるし、他の利用者の耳を食いちぎったこともある。気に入らないことがあるとスリッパを天井に向かって投げるので、電灯が割れて落ちて来る。カレーライスを皿ごと天井に投げたこともある。夜中にトイレにペーパーを詰めて溢れさせ、トイレ中を水浸しにさせる。散歩に出れば横断歩道の白線を踏みに車道に走っていき、轆かれそうになる。筆者はつねに体に4個か5個、彼女の歯形をつけていた。それは普通のことなのである。

Aへの支援は熾烈なものであり、筆者は次第に心身ともに追い詰められて行った。ある時、行動を制止され、狼少女のように裸で四つん這いで泣きわめ

く彼女を見ながら、同じ人間と思って接することはもうできない、と思った。少なくとも兄弟姉妹として接することはもうできない。

30年前の施設は利用者が暴れた場合、職員はその場の判断でヒモ等で行動抑制することが普通に行われていたから、筆者は先輩職員に指導されてAを大胆にヒモで抑制することにした。人間とは自分の生存が危うい時にはどんなことでもするもので、自分もそういう人間の一人であることを腹の底から思い知らされることになる。他児を嘔むので危険回避のためと言い訳をして、毎日のようにAを一定時間縛った。Aはユニット中に響き渡る声で泣き喚いていた。

しばらくして筆者の中で問いが生まれた。自分は一体何をしているのだろうか、何のためにここにいるのであろうか、という問いである。キリスト者として信仰に基づいて福祉の進路を選び、施設勤務も厭わなかったはずだった。縛る決意をした時に、筆者は祈りを全く失った。

しかし、しばらくしてある聖書の言葉が筆者を追い詰めた。マタイ福音書の「これらのもっとも小さなものの一人にしたのはすなわち、私にしたのである」である。筆者は信仰に立ち戻る決心をして、Aと再び兄弟姉妹として向かい合うための闘いをするようになった。

闘いは負け戦で、どんなにAと向き合おうとしても、祈って仕事に入った3分後には負けて流されそうになる。しかし、負けるたびに信仰に立ち戻ることを学んだ。それが筆者のキリスト者としての再出発であった。

筆者には中高の先輩で、本学科の卒業生でもあり、県立の知的障害者施設に勤務し数年で夜勤明けの居眠り運転で亡くなった人がいる。中高大とキリスト教主義学校で学びながら信仰を持たなかった彼女は亡くなる少し前に洗礼を受けていた。その理由は「信仰がなければ利用者を同じ人間として兄弟姉妹として支援し続けられない」ということであった。彼女もまた、筆者と同じく自分の限界に突き当たり、神の呼びかけを聞くことになったのだろう。

おわりに

福祉を専攻して一定の専門性があっても、そして強い人権感覚や信仰があっても、福祉現場の現状を背負いながら重度の利用者を支え続けることは容易いことではない。ある人権感覚の鋭い卒業生が言った。「僕は学生の時は人権と社会正義から障害者差別を批判し、ノーマリゼーションを叫んできました。しかし入所施設に勤務して理解できたのは自分の生きる空間、吸える酸素が充分でないときに、全くそれはないに等しいということです」。また最近、疲弊して異動した元グループホーム職員の卒業生が言った。「自分の日常的な関わりが虐待や人権侵害になっているのではないか、というおそれが常にありました」。入所施設より地域に根差し、利用者にとっても職員にとってもよい場所とされているグループホームでさえも限界状況から必ずしも自由ではないのである。

誤解を避けるために付け加えれば、重度障害を持つ人たちと共に生きることは喜びでもある。生命そのものの輝きや笑顔に生きる力を日々貰うことが出来る。筆者も今でも時々Aの夢を見ることがある。限りなく優しい夢だ。しかしそれは崩れやすい、非常に危ういバランスの上に成立している。喜び、専門性、倫理観と職員自身の生存との危ういバランスである。この均衡が破れる時にいつでもどういう形でか、虐待や人権侵害は起きうる。

犯人にも利用者の笑顔から力を貰った瞬間はあったに違いない。しかし専門性に乏しく倫理感も弱く、人格的にも未熟だった。バランスはいとも簡単に崩れてしまったのであろう。そして崩れたバランスを正当化する論理を日本社会の風潮から汲み取り、思想化してしまったのではないだろうか。

注

- (1) 植松被告に関しては自己愛性人格障害など複合的なパーソナリティ障害と診断され、完全な刑事責任能力あり、とされた。

バーンアウト体験の思想化

- (2) この個人的仮説については事件後朝日新聞はじめ、番組化はしなかったがNHK等から取材を受けた。朝日のインタビュー記事は『妄信―相模原障害者殺傷事件―』(2017), p.136-139, 朝日新聞出版, に転載されている。同書には他の施設勤務経験者の体験も語られ、筆者の仮説を補強している。
- (3) 「獄中の植松聖被告から届いた手紙」(017) : 『月刊創』9月号, p.28-33. 「植松聖被告がしたための『獄中ノート』の中身」(2017) 『月刊創』10月号, p.64-70.
- (4) 7項目とは「心失者の安楽死」「大麻使用の公認」「カジノの積極的導入」「軍隊と兵役義務」等であり、かなり荒唐無稽な脈絡のない条項も含まれる。
- (5) 「相模原事件・植松被告接見報告」(2017) 『月刊創』10月号, p.56.
- (6) 「獄中の植松聖被告から届いた手紙」(2017) 『月刊創』9月号, p.31.
- (7) 同上。
- (8) この点についてはインタビュー実施者も肩透かしを感じているようであり、植松の更なる説明を聞く必要がある、としている。『月刊創』9月号, p.25.
- (9) 「植松聖被告がしたための『獄中ノート』の中身」(2017) 『月刊創』10月号, p.67.

尚、本文はキリスト教雑誌、『船の右側』2016年10月号に掲載したものを全編に渡りかなり大幅に加筆修正したものである。同記事はキリスト教雑誌であるため力点はキリスト教信仰にあり、テーマそのものも全く異なっていて転載とは言えないが、ここに一応お断りしておく。同雑誌の責任者にも承認を得ている。